

愛珠

想い出ずるままに(一)



中村道子

(一) 保育実習と愛珠幼稚園参観

師範学校の生徒である私は、教生時代が一日も早く来てほしいと待ち望んだ。それは教生がすめば、卒業ができるし、いよいよ教師として社会に出られるからだだった。

私は子どもの時分から教師になりたかったし、両親も女子の職業として一番よいと思うと私に促していた。「女の子はどんな不幸に遇っても、資格だけでも持っていることは安心だ」と父は言った。母もそれに合わせて、「これは願うことではないが私もそう思う」とつけ加えた。自分もその通りだと思った。

二学期はじめに教生期間の掲示があって、大正三年十月および十一月の二か月間に行なう、右詳細は追って報告すると、四年生

の自分たちに通告された。

いよいよ附属小学校と幼稚園に実習に出ることになった。小学校は一年生、幼稚園は三年保育であった。

学校は省くこととして、幼稚園での担任は主席保母の大倉ハナ先生で、保育の責任を持っておられた。美しい目鼻立ちの整った毅然とした上品な容姿をしておられた。子ども好きな私は、この期間はとても楽しかった。

幼稚園の玄関に玩具の箱が二個置いてある。

そのひとつには、正月前とて羽子板が二十枚程はいついて、どれにも桃割や高島田の和装をした可愛いお姉さんが、羽根をつこうとしているボーズの絵がかいてあって、色の調子があかるくて、自分もつきたいと誘われるようなものであった。

そしてその隣の箱には、男児の好きな馬の紐が乱れて、これ

も二十個程はいつていた。この馬の紐は幅一寸程の真田紐に、直径五分位の真鍮の鈴が三個、三寸位の間隔で縫いつけてあって、ふたりの男の子のひとりの中にはいり、ひとりが後の端を持って、ボカボカいいながら飛び回れるので、元気な男の子はとても好きな遊びだった。幼稚園の中にある広い築山を走り回っては満足していた。一番高い所で約三十尺、そして種々な起伏をつけているから、運動量も多く変化があった。

私は看護当番の時、幼児に誘われるままに騎手になって、この男の子と共に山を走り回って頂上で一休みし、そして降りて来た時、窓から見ておられた大倉先生に「おもしろく遊びましたね」と誉めていただいた。看護の大切なことは、日頃注意されていたから私は嬉しかった。

楽しかった保育の実習も、後四、五日で終わるかと思うと、何となく惜しまれて別れるのが嫌であった。「今日は水曜日、明日は木曜日、明後日は金曜日」と、指折り数えれば、土曜日は実習の終りで、時日は四日しかなかった。

午後の保育を終わり、明日の保育の予定を大倉先生にたずねに行くと、「金曜日には愛珠幼稚園へ外部参観に行きますから、八時には支度をして、全部幼稚園の玄関に集合して下さい」と、聞かされて私は嬉しかった。明日の保育準備もそこそこに終えて、急いで寄宿舎に帰り、大阪地図を広げて北浜を捜した。愛珠幼稚園

は北浜にある。

想い起せば附属小学校へ登校するのに、枸橘の回らされている梅屋敷や、葡萄畠や桃山中学校など、菜畠と麦畠の間を通過して、四季折々の花を見、雲雀の歌を聞きながら、小川のせせらぎに目高を追うなど、八年間も田園の中を通い続けて、そのまま師範学校の寄宿舎生活にはいった私にとっては、市中のしかも大阪北船場に行くことは、とてもとても嬉しかった。愛珠幼稚園のことは、以前に新聞で読んだことがある。それは明治十年頃できた幼稚園で、しかも珍しい幼児の遊戯劇を、きれいな衣装をつけて上手に発表したという記事が出ていたことを想い出して、期待して、この日を待った。

金曜日の朝には、昼食用の弁当ができていて、寄宿舎から幼稚園の玄関に集まった。大倉先生の引卒で、上本町六丁目から西へ折れ、松屋町から末吉橋へ出た。巡航船が川の中を北へ運航する。珍しいけれど団体行動では立って見ていることはできない。本町橋から西へ折れて堺筋を通った。進むにつれて大きい店がだんだん増え、奥行のずっと深い家もあった。今橋一丁目で左へ折れて西へ進むと、間口の広い家が右角にあった。十五、六間もあろうか「これが鴻池の本宅よ」と教えられて、驚異の目を向けた。家は普通の構えと全然違い、入口も二間で、奥行のよく見える竈戸を透して、金檻の中に丹頂鶴が二羽遊んでいるのが見えた。

昔の祝日の正門



そんなことに驚いている間に、病院の前に出たので門標を見ると緒方病院とあった。緒方洪庵先生と関係のある病院ではないかと思つた。ちょうどその筋向かいあたりに、御用邸を思わせるような門構えがあつて、これに調和した広壮な家の前に止まつた。大阪市立愛珠幼稚園と門標がかかつていた。

大倉先生が「はいらせて貰いましょう」といって下さつたので、門をはいって中のありさまを見た。今までいろいろな校舎を見たが、ここはお寺のようで、どうしても学校とは思えなかつた。

門から正面玄関までを、少し斜めにとつて約四間程の間、みぎきのかかつた御影石を組合わせて敷きつめ、車寄まで続いていた。

車寄は四坪程の広さで、六尺と二尺の同じ御影石を縦に敷き詰めて、まいら戸が左右に開かれてあつた。玄関の上りがまちの二段の石段は、長さ二十尺の延石で全く驚いた。

玄関も四坪で、ここの板の間は美しく拭き込まれて、二尺程の高さを保つて左右の柱に腰を打ち付け、四寸の杉の丸木を渡し、玄関へはみ出さないようにしていて、全く御殿の車寄を見るような感じであつた。もちろん私たちはそこから中へはいらず、右側にある石畳の通用口からはいった。ここも十五、六坪あつて、幼児や職員の昇降口で、幼児の下駄箱は全部壁の中にはめ込みになっていた。

玄関の前はずつと二間幅の廊下で、遊戯室

寄りに一尺幅のレールが向うの窓際まで敷いてあった。ボートを走らせるそうである。

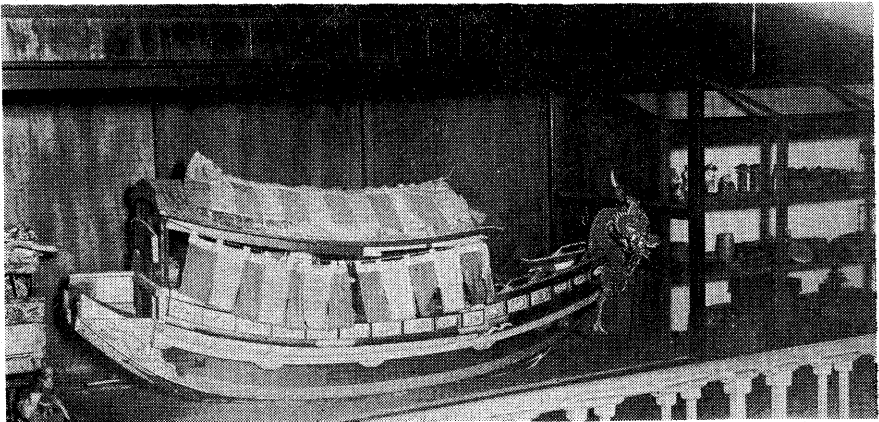
遊戯室は六十坪程あって、廊下を隔てて木煉瓦の遊園を見た。眼にはいる物、皆驚くものばかりで、廊下から一間程の藤棚が突き出され、其のまま遠く向かう砂場の上を覆っている。春になって新芽が吹き、続いて紫の花房が下がれば、さぞかし美しいことだろうと想像した。

私たちは草履と履替えて下駄を新聞に包み、各自がそれを持って遊園に面した保育室に案内された。教生たちのために今日の休憩室に設けられたものであった。稲葉園長の案内で室にはいり、続いて御挨拶を受け、大倉先生より「自由に参観させて貰いましょう」と聞かされたので、待っていたといわんばかりに、普通の施設と変わっているから、物珍しく己がじし四散した。私は三年保育受持ちの者といっしょに資料室に行った。

一間間口の硝子戸をあけると、たくさん戸棚が列んでいて、皆調和よくできているから特別注文の品と判った。細長い二段の戸棚が、背中合わせに四個列んでいて、和文の古書が種類を揃えて列べてある。いずれも教育書で珍しく思った。

これらの古書は、明治初年に東京師範学校から発行された、幼稚園記をはじめ、幼稚園創設とか、幼稚園法二十遊嬉や、表情遊戯、その他唱歌、図画、修身、併びに手技標本の種々、観察本、話集

等、いずれも目を見張る物ばかりでその頃の指導者や保母志望者の、研究心が盛んであったありさまを偲んだ。殊に日本お伽噺や日本昔噺などがたくさん積み上げてあって、子どもの時読んだことを思い出していちいち読みたいと思った。そしてこれらの本を前にして、産業の額が十一、二面一列に展開されていた。これは八寸と六寸の大きな写真画で製茶、印刷、料



龍頭の屋形船



理、製靴、鍛冶、大工等々の実態で、現場に職人たちの服装も明治初年の状態が懐しく思われて、まことに珍しい物であった。

壁寄りに長方形の大きい戸棚があった。長さが一間足らずの大きい屋形船がはいっていて、美しい色違いの緞子を縫い合わせて作った幕を、軒から垂らして囲み、船縁の模様と調和して飾り付けにしたものであった。この船の竜頭はきれいな銀と青の色取りで、両眼と角の金色は昔を偲ばせて光っていた。

これと同じ戸棚に置いてある一尺四方の山車も、金襴の布で取り巻かれていて、牛挽きが一人作ってあった。

また別の戸棚にはいっている女児用の飯事道具（まじり）は、雛祭用にしたかと思われるような漆塗の玩具で、中に可愛らしい碁板や将棋板もあった。貝合わせと大きく書いてある一尺角の木箱が三つあって、その一つがあいていた。見ると開いた大きい蛤の中に、平安時代の衣裳をつけた御殿風の人物が、庭の草花をあしらった竹垣を背景にしたり、また御殿や几帳を蔭にして、極彩色に美しくかかれてあった。

蛤は片方だけでも一寸五分だから開けば三寸内外で、生後何年位でこのように大きくなるものかと、はじめて見た私は非常に驚いた。他の箱の蓋に「草の部」「花の部」とあるからこの箱は「人の部」であろう。いずれも美しい優雅なものであった。そしてその絵を合わせると、左右正しく閉まって大きい蛤になる。また閉

じてある貝を開けると、中の絵は左右揃ってひとつの絵画になるのであった。

観賞・想像・比較・記憶・貝の成育・指の感覚運動など、語らずして会得できる優雅な高尚な玩具であった。

和本の表紙に唱歌と書いてあったから開いて見たら、平仮名で歌が書かれ、その横に雅楽の音名が朱書してあった。幼稚園創設当時の最初の唱歌らしい。私たちにはこの音名は判らなかつた。使用した楽器は十三絃らしく、長い木箱が三つ積んであったが、その一つの、蓋のずっている一箱を見たら、雅楽用の和琴が一面はいつていた。

そして戸棚の中には紫檀の拍子木や、先端を切り取った長い三角形の木箱の中に、一本の足が着いている三味線とバイオリンの弓のはいつている箱も列べられ、その横に五、六個の美しい唐紙に包まれた調子笛があつて、一個は開いて置いてあつた。思うに拍子をとりと歌に合せて琴や三味線をひいて、優美な遊戯をして遊んだことだろう。粘土で作ったペーターペンのデスマスクも木箱に入れて、この戸棚に列べてあつた。

この部屋は十八坪で、全部緑色の模様のあるリノリウムが敷き詰めてある。隣りに部屋があるらしく間仕切りがしてある。まいら戸と同じように、二寸幅で棧が入れてある。開けると畳の部屋であつた。「ああ!!これが先刻稲葉園長がちょっといつておら

れた撰養室のことだな、そしてここが標本室に当たるのだ」と思つた。

間仕切の裏側は「愛珠」という文字を、丸く図案化した模様をそこここに散らした襖紙で、美しく表装して襖に仕立て、四枚とも引手を着けて立派な十二畳敷のお座敷になっている。一間の本床には、松に明烏の墨絵と、若竹の根本で鳩が何か啄んでいる軸とを、一体にしてかけてあつた。また間中の中床には、一枚板を張つてその下を高さ一尺五寸の押入にし、襖と同じ模様の紙を用い、引手も同じ小さい可愛らしいのを二こ着けていた。中床の花瓶には、われも、うが一枝生けてあり、本床には青磁の高炉が置いてあつた。下手に網代の戸が閉めてあつたので、失礼とは思つたが中を開けてみると私は驚いた。真に調つた水屋であつた。この部屋でお茶の会があるのだとすぐ判つた。

たたみの部屋の立居や、話し合いをしたり、時には客間に使つたり、また気のこらぬお茶の会に使われることと、いろいろ想像した。

全園の建築が真に堅牢で、しかも意を優美に用いられているために、人々に安心感を与えることと觀察した。そしてどの部屋の床も、廊下も、全園が同じ梅材で、殊に柱は八寸角の節なしの正目であつたので、午後運動場を清掃していた小使さんにたずねたら「梅の木は縦に強い木やそうでごあんな」といつた。



標本室を出て来た時、三年保育の幼児が遊戯をしていたから、早速遊戯場へ行った。

遊戯室は明るくて、室内とは思えなかった。これはたいそう広い、六十坪以上はあった。そしてピアノに合やす足音は、板の間であるのに少しも響が聞こえない。

正面の東を避けて、南・西・北の三方に二階が設けてあって、しかもこれを支える柱が一本も無い。よく見るとちょうど棚を支えるように、美化された三角形の鉄板を受けにし、同じ鋼鉄の鉄板が遊戯室の柱を囲むように取り巻いて、この部屋を支えている周囲の柱と共に、そのまま床下に支え込ませてある。これにも私は喫驚した。天井は高く格天井になっていて、シャンデリヤが長く下がっていた。けれどもこの欄干より下には下がっていない、私は二階へ昇った。二階は三段の階段式になっていて、最上段は幅三尺はあった。そして周囲に高さ三尺程の欄干を、南・北二か所の階段から張り巡らして、この鉄柵を直径一寸五分の真鍮の管で繋ぎ、一間毎に唐草模様の同じ鉄鑄で止めた精巧なものであった。

室の中央の高い天井から一本の細長い鉄棒が下がって、その先が三弁の花のように開いて、尖端に花が咲いたように、電気の傘とそれと似合った大きい電球が三個着いていた。そしてこれを取り巻くように、天井の四か所から鉄棒が下がっていて、これには尖端に同じ電気が取り付けられてあった。中央の電気のように飾り



がないだけ、一層中央を引き立てて、遊戯室としてよく調和していた。

二階の板の間は清潔に拭き込んであった。これは遊戯会の時に全部観覧席になって、美しい毛氈を敷き詰め、欄間の細間から家族の人たちが、わが子の遊戯をうれしそうに眺めたありさまを想像させた。この幼稚園の遊戯会は名物になって、どの新聞の三面記事にも賞賛していた。殊に幼児の遊戯劇は、幼児の劇として珍しく、稲葉園長が英書の読解ができたからよく発表せられ、市内の幼稚園も試みるところもあったが、愛珠のように盛大ではなかった。

遊戯室の一隅に三尺と四尺の大きな角太鼓が、頑丈な立派な枠に吊るしてあった。竜の極彩色の模様を描きばちの当るところは乱れている。

保育は午前中で終わったので、私たちは持参の弁当を開けて昼食をすませ、食後は園内の施設を自由に視察した。

廊下の日覆いと思われる、この藤棚の藤の葉が、今は大分散っているが、繁っている時は、部屋が暗くなるだろうと想像した。藤の木の株の周囲は、約二尺平方程露地になっていて、杭の高さは二尺程で、遊園の草木のあるところは皆こうした囲いがしてあった。この運動場と廊下と続いて保育室も高さが同じだから、非常に広く見えた。この頃の最新式理想的な運動場であった。

砂場とつり橋



廊下に十間程の間隔をとって、一尺平方の碁盤格子に鑄た鉄板を、塙め込んで、室内の湿気抜きにしていた。長い廊下の尽きた所、北へ曲がる角に、六坪程の長方形の砂場があって、その上に一尺幅の吊橋がかかっていて、幼児に手頃の鉄索が着けてあつ

いそうだと思つた。

池も作つてある。小さい半坪程の浅い方の中央に、三尺程昇つてゐる噴水がある。その横に橋を思わせるような、長手の庭石を沈め、小池と仕切つて二坪程の深い池が続いていた。築山の頂上

た。鉄索があるとはいへ、下で砂遊びをしてゐる上をわたられるのは、恐ろしく不安だろうと想像した。安心して好きな砂遊びができない。橋を渡る子どもは、五尺程の直立した鉄の梯子を昇り降りするのだが、これは良い運動になるが、砂場の好きな子どもはかわ

に庭石を立てて滝を作り、水は瀬をなして大きい池へ流れ込んで
いる。水の落ち口の石は、覆いかぶさるように大きく池の上へ突
き出て、その下が深く暗く魚の巢になっていた。そこは一尺五、
六寸の深さで緋鯉が五、六尾泳いでいた。

池に沿って小高い築山へ昇る途中に、大きな桃から誕生したば
かりの桃太郎の像があった。ここから木立を縫って、昇った頂上
に、神宮殿があったので、礼拝をすませてから、庭を暫く見ていた
が真に落着いて寂^{さび}ていた。

焼縄で竹を編んで蓋にし、自然石で囲んだ四角い井戸がある。

井戸より少し下げて、大きい甕^{なつめ}の手洗を地中に埋め、その前は割
合に広く深く掘って底に平たい小さい石を置いて流しのようにし
ている。茶室の蹲^{つゝみ}いであることが直ぐ判った。手洗の甕には美し
い青苔がのつていて、きれいな水がいつぱい張ってあった。四枚
の障子を開けると、先刻はいった畳の部屋になる。大きな靴脱の
石から振り返ると、こんもり繁った平戸の植込みの間に調和よく
石燈籠が立っていた。誰かの屋敷の庭をそのまま使つてあるよう
に思われた。誠に落ち着いたこの庭の佇^{たやす}いは、私の心を落ち着
けて良い気持にしてくれた。

大きい池を正面に見る所に、十坪ばかりの花壇があつて、そこ
にはどれも中輪の白や黄色の菊の花が咲いていた。晩秋のことと
てどれにも勢いはあまりない。私がひとりで花壇の前に立つて、

じつと花を見ていると、後に人の気配がしたので、見ると稲葉園
長が立つて笑つておられた。「先生お花がたくさんありますね」
といったら、「どれもあまりよくないがたくさんあると美しいで
しょう。一つ一つを見ればつまらない花でも、たくさん集まつて
いれば美しいということを、子どもに自然に知つて貰いたいと思
つて植えました」と、おっしゃりながら、倒れかけている枝を起
こそうとせられた。私はこのひとことでビシッと心を叩かれたよ
うに思った。つまらぬ花でも、集団の美しさは一個では判らな
い、大輪の花も立派だと思ふが、小輪の集団の美もまた捨て難
い、これはどちらもよい、ただ片寄ることなく、総合されてある
花壇の中に、ひとつの我を捨てた統卒を得て、いずれも咲きはこ
つている集団の美は、一層高い美があると思つた。集合のしらせ
があつたので休憩室へ戻り、茶菓を頂いて、園長先生の遊戯劇の
談話を伺い、一同は辞去した。

私の参観報告には、(一)建築の広壮、(二)青白い幼児の健康状態、
(三)園内に発刺とした雰囲気の流れを感じなかつた、(四)保育の配慮
は考えられている、(五)園長の花壇の構想、(六)看護を元氣よくしてほ
しかった、しかしこれは服装がある程度関係していると思つた。

楽しかった教生の時代も終わつて、卒業を待つばかりになつ
た。越えて大正四年三月二八日、これは待つていた私の卒業の日
であつた。

(元愛珠幼稚園)